

## 遠藤周作生誕百年記念座談会

### 遠藤周作の文学の魅力―共感する神

森 一 弘  
伊 藤 幸 史  
山 根 道 公

山根…本日の遠藤周作生誕百年記念ミサと座談会をさせていただくこの会場は、まさにネラン神父のお名前をいただいているネランホールですけれども、一昨日の三月二五日がネラン神父の帰天日でした。遠藤さんが留学できたのは、ネラン家の人たちのおかげでした。フランスの篤志家の支援で戦後のカトリック留学が始まったと言われますが、フランスの中心となって支援したのがネラン家でした。そのため、遠藤さんもフランスに行ったらネラン神父のご家庭にも行って、ネラン神父も日本にきた時は遠藤家に滞在しています。そこで起きた面白いことなど『おバカさん』にも投影されています。そして遠藤さんが帰天し、遠藤さんの生涯が何だったのか端的に語ったのはネラン神父の追悼文だと思います。それは「パウロ遠藤周作は、異邦

人伝道者としての生涯を全うした」ということを書かれました。遠藤さんは、異邦人の苦悩を背負ってカトリックの作家として日本人に実感できるイエスを伝えることを生涯のテーマとしてその影響の大きさは異邦人伝道者パウロという洗礼名にふさわしい生涯を全うした遠藤周作だったと語っておられたことを思い出します。

遠藤さんはちょうど八十年前の二十歳の時にこの真生会館の前身のカトリック学生寮に入っています。ここで寮に入らなければ、遠藤さんが文学の方に進んだかどうか分からないということがあります。それもある意味挫折と言いますか、マイナスのことが起きたことがきっかけでもあります。父親からは医学部しか受験を認めないと言われていたのを、遠藤さんはやっと慶應の文学部の予科に入って、それを父親に言うところ「もう一回受け直さなければ勘当だ」と言われ、家を飛び出して、そしてこの寮に入りました。寮に入る前にも、遠藤さん自身浪人時代が長かったのですが、その時にお母さんの勧めもあり上智大学の予科だけは受かって行っていました。ところが、それも一年で退学し、その後お母さんの元から、東京のお父さんの家に移りました。それも遠藤さんにとってはお母さんに対して大変後ろめたい傷として残りました。お母さんを裏切ってしまったという後ろめたさを持ちながら一年間受験勉強をして慶應の文学部に入りました。その後お父さんの元を離れて、この寮に入ることでお母さんの世界であるカトリックの世界にまた戻ってきました。この寮を勧めたのはお母さんと、お母さんを導いていたヘルツォグ神父だったのではないかと思えます。その神父がちょうど上智大学の教授になっていた時で、その関係もあったのでしよう。

そしてこの寮に入ってみると、当時の日本を代表するカトリック哲学者の吉満義彦さんに出会うことができました。遠藤さんは当時二十歳でしたがドイツ語を学び、哲学の方に進むつもりでいたようです。上智大学予科でも宗教哲学的な論文を書いていました。そんな遠藤さんに吉満さんから「哲学なんかより、文学の方が向いているよ。僕の知っている人を紹介してあげよう」と言われ、堀辰雄を紹介してもらい、文学の道に入っていきました。西欧のカトリック文学も吉満さんから直接学んでいきました。カトリック作家遠藤周作の誕生のある意味原点になっているのは、この場所です。そんな場所で今日生誕百年記念の座談会ができるということ、遠藤さんも喜ばれているのではないのでしょうか。

司会…司会を務めさせていただく、上智大学の学生の渡邊眞子です。それではまず質問していただきたいと思います。百年前に生まれた遠藤周作の生きていた時代を共にしていたお三方に、それぞれ、自分の人生の中でどのように遠藤周作およびその作品に出会われ、そこから何を受け取り、どのような影響を受けたのかについてお話しただきたいと思います。

伊藤…遠藤さんと出会う大きなきっかけは、私が大学浪人時代、強い自己嫌悪に満たされていたことにあります。その大本の原因は私の中学時代の経験でした。その頃は校内暴力が激しい時代で、学校の中はある意味、無法地帯のような状況でした。ちょっとした不器用だったり弱く見えたりすると、集団で殴る蹴るの暴行を受けたりするのです。そういう状況の中で、私は

自分に火の粉が飛んでこないようにすることに懸命になっていました。何の罪も無い同級生やクラスメイトが殴られていても、それに「やめろ」とは言えないんです。後の仕返しは怖くて言えないんです。そういう自分の臆病さや惨めさを強く感じたのが中学時代でした。自分はイヤな奴という自覚です。

その後、高校に行つてからは、何とかそんな自分を変えたいとラグビー部に入りました。身体を鍛えて強くなり、弱い自分を変えたかったです。確かにその結果、身体的には少し鍛わり、周りからも体力では一目置かれるようになりました。でも自分の心の底では、相変わらず弱く臆病でイヤな奴という自覚は強かったですね。表面的に変わっても、自分の本質は変わってない。その後、部活が終わり大学受験期に入ると、同級生は一気に受験に向かいます。しかし当時の私は身体を鍛えて自分を変えることに一生懸命で、勉強など全くしていませんから、その流れに付いけず疎外感を感じてました。そんな時に失恋をし、受験に全部失敗する中で、私は自己嫌悪の塊となつていきました。

そんな時です、遠藤さんの本と出会つたのは。遠藤さんの本の中には、弱者がいっぱい出てきます。そうした弱く惨めで、社会的にはどうしようもないと見られる人が、本の中では、何とも言えない温かな光に包まれる。そんな温かな眼差しをもつ存在を遠藤さんは描いています。マイナスはプラスに変わるといふ見方も衝撃的でした。マイナスはマイナス、それは叩き潰して変えるしかない、当時は思い込んでいましたから。こうして大学浪人時代に遠藤さんの本にのめり込んでいって、やがて遠藤さんがカトリックだということを知り、井上神父さんが親

友であることも知りました。それで、浪人時代に大学受験で上京した機会を利用して、当時東京の関口にいた井上神父さんに会いに行ったわけです。遠藤さんの本との出会いから井上神父を知り、やがて信仰へと結ばれたということです。

司会…ありがとうございます。では次に、森司教様、この百年の間にあつて、遠藤周作は、日本のキリスト教、カトリックの世界においてどのような意味をもつ、作家であつたといえるか、その時代の中での評価の変遷にもふれていただけるとありがたいです。

森…わかりました。

遠藤周作が『海と毒薬』とか『おバカさん』を出した頃僕は大学生でした。そして遠藤さんがその後『沈黙』を書いた時期は、僕がちょうどローマの神学の勉強をしていた時だったんです。遠藤周作が日本の教会でどういう意味を持つかっていうことを理解していただくために、ちよつと裏話をします。

遠藤さんが亡くなつてしばらく経つてから、遠藤さんの奥さんの遠藤順子夫人が僕のところを訪ねてきたんです。あの『沈黙』の舞台にもなっている外海、「長崎のすぐ見晴らしのいいところに、自分の夫の記念館を作りたい」って言って来られたんです。で、どうしたらいいか、どういう手順を踏んだらいいかっていう相談だった。で、奥さんにとってはこの長崎に遠藤さんの記念館を作るにあたっては、長崎教区に相談にいつておくのが必要か、考えておられ

た。だから、そこに行くべきかどうかを僕に相談に来た。で、僕はその時、こう答え  
たんです。

「あの、相談に行かない方がいいですよ」

というのはなぜかっていうと、僕が帰ってきたのは遠藤さんが『沈黙』を書いたちよつと数  
年後のことであって、あの当時の長崎教区の責任者が『沈黙』は読んではいけないと禁書扱い  
にした。そしてその後も、女子パウロ会が月刊誌として出していた『あけぼの』という雑誌で、  
離婚問題とか、同性愛の問題とかを特集したものが出ると、女子パウロ会の責任者が、お説教  
くらっちゃう。そういう時代だった。

だから、僕が助言したのは、まず長崎の市長さん、あるいは知事さんに直接相談に行きなさい。  
で、長崎の文化活動として認めてもらえたならば、筋が通る。そして長崎市が文化事業と  
して承諾したっていう形だと、長崎教区にも認められるでしょう。というような経緯があつて  
あの長崎の記念館はできたわけね。

あの当時、遠藤さんの心の中では自分が生涯追求した自分の気持ちをもっと込めて作り出し  
た作品『沈黙』が禁書になった。そして日本の神学校なんかの神学者たちもかなり否定的。そ  
れで遠藤周作さんはそれを自分の心の傷として、抱えちゃったわけね。で、そこで遠藤さん自  
身が壁にぶつかってたんです。その時に、『あけぼの』を担当の女子パウロ会のシスターたち  
と遠藤さんが、相談し、話し合ったわけですね。で、遠藤さん自身が日本とヨーロッパのカト  
リック教会、世界のカトリック教会の問題点を、もっともっとあきらかにしていく、もっと、

浮かび上がらせて明確にしていきたいっていう思いを持っていらした。で、カトリック教会の体質に対して、すごく反発も持っていらした。だから、『あけぼの』の編集部の方と「神父が答える身の上相談」っていう企画を作ったわけね。で、その神父が答えるっていう、その「答える」相手として、僕を女子パウロ会が選んだわけね。で、読者が質問してくれるという形で僕は毎月毎月答えていくんですけども、実際は遠藤さんが読者の悩みを代表して相談の質問を作るわけです。だから、「同性愛の人に対して教会は厳しいんですけれども、どう答えますか」って僕にこう、いうわけ。それからヨーロッパの歴史を見るとカトリック教会の教皇が、十字軍の先頭に立ってサラセンに向かっちゃってる。「ああいうひどい行為というのはどうなんでしょうか」とか「カトリック教会の聖職者たちのいろんな権威主義的なことはどう思うんですか」って言うって、一信者があたかも相談するような文章、質問を、遠藤さんが毎月作って僕のとこに持ってくる。それが四年間続いた。遠藤さんと僕とは十歳違いです。で、遠藤さんにとっては、カトリック教会の体質をつつこんでいって何か新しい道を探りたいという思いがありますから、すごいあのシビアな質問が毎月毎月くるわけ。で、それで僕自身もある意味では鍛えられたわけです。その時期は日本の教会に理解されてない遠藤さんのそういう思いが込められていた。そういう時期だった。

それが僕にとっての遠藤さんとの関わり、具体的な関わりだったんですね。それで、何回か直接お会いしたこともあるんですけども、遠藤さんの問題意識と僕の問題意識とは、ちよつと違うんですね。十年、世代が違うので、遠藤さんがぶつかった壁は、僕にとってはまた別の

意味を持っていた。だから、伊藤神父さんは素直に井上神父さんや遠藤さんの影響を受けたって言われていきますけれども、僕は、遠藤さんとか、井上神父とは距離を置いた。後で質問があればなぜそうなったのかって、お話ししますけれども。日本の教会への問題提起としてはお二人を評価しています。それで、進んでいった道は僕と明らかに違いますが、カトリック教会の本質はどこにあるかっていうことを問い続ける道を進み、刺激を与えてくれたって意味では、あの遠藤さんは僕にとっては大きな影響を与えた方だっていうのが、まあ、今ここで言えることなんです。

司会…ありがとうございます。次に山根先生お願いします。

山根…はい、私自身の遠藤周作との出会いとか作品というのは、私がちょうど一九六〇年生まれなんです、遠藤さんの人生がちょうど半分くらい経ったくらいで生まれているって感じですね。それで高校とか大学とかって時に遠藤さんの読書会も行われていて、出会うことが多かった時期でした。決定的な出会いっていえるのは、私自身が中学に入る時に病気をして、二年間入院生活をしたことでした。最初はちょっと危ないとも言われていて、そんな安静の中では本しか読めませんでした。そんな時に兄が本を持ってきてくれて、世界文学少年全集みたいなものだったり、日本文学全集を持ってきてくれたんですね。日本のは読んでみると、何となく暗いんですね。でもそれなりに生きるということについて描いています。西洋の世界文学



の中には、光がありました。いろんな問題を描く中でも光があつて、その光の源はイエスなんですね。やっぱり、聖書やイエスに関わった人たちが描かれているところに惹かれるものがありました。ですから文学を通して、キリスト教、イエスに関心を持つていきました。そういう中で大学では遠藤さんの作品を読むようになりました。遠藤さんの作品の中には、光があり、その光の源が示されているように感じました。人間と人間との関係、人間と社会との関係などを超えた、目に見えない、もう一つ違う垂直の縦の軸からの光がある、そこに惹かれました。

そういう中で井上神父の『余白の旅』に出会いました。その『余白の旅』のなかで、井上神父がフランスで西洋のキリスト教にぶつかって、自分が日本人であることを強く意識して、日本人である自分の心情でキリストの福音を捉え直していくということテーマにしました。フランスから戻ってきた時に、遠藤さんにそうした課題を話したら、お互い同じ課題を持っていくことがわかりました。それは生涯を賭けても自分たちで達成できるようなものではないので、自分たちは次に続く世代のために、道を切り拓いて踏み石になろうという志を、遠藤さんと井上神父は共に決意しました。それがちょうど『海と毒薬』が書かれた直後のことです。

それを受けて遠藤さんの文学も変わってきます。キリスト教と日本人との距離を問題視していく方向から、キリスト教と日本人との距離を埋めていく方向に変わります。その中で病床体験もあり、『沈黙』もうまれます。そして今度は『沈黙』がきちんと理解されていないことを知ります。出版当時、『沈黙』という作品に込めたものが理解されず、誤解されて批判を受けました。私は文学作品からイエスに関心を持ち、中高生の時から近くの教会にも通ってはいま

したが、何か距離感をずっと抱いて、馴染めないように感じていました。それで井上神父の志は自分の目指していたものと重なるものがあり、井上神父のところに通うようになりました。そしてちょうど「風の家」を始めると言う時だったので、「手伝います」と言ってそれ以来三十七年間、ずっとその活動に携わってきました。そういう中で遠藤周作と井上神父の二人の志を受け取って次につなげていくのを使命と思っています。

司会…では次に現代人が抱える問題と遠藤作品の関係について。キリスト教と社会的問題を考える中で、遠藤作品が与えてくれるヒント、読み継がれていく意義はどこにあるとお考えですか。

山根…そうですね。今、伊藤神父さんが言われた通り、今の現代の多くの人たちは、特に若い人たちは本当に生き悩んでいる人が多くいます。遠藤さんは生活と人生を分けて考えますが、目の前のことだけを考えて悩み、他の人と比べながら苦しんでいく、このような目に見える次元を生活の次元といいます。それに対してもうひとつ別の次元、人生の次元という視点はどちらかというと人間を越えた目にみえない眼差しの中で自分に起きる出来事の意味を理解します。そういう意味で、遠藤さんは実に挫折ばかりの人生でしたが、そんな中で、それを垂直の軸、目に見えない、それこそ遠藤さんは「イエスの眼差し」という風に言いますけれども、その次元があることで、どんなことでも意味があるという風に捉えることができる、それは作品

の中にも入ってるし、ちょっとしたユーモアエッセイの中にも描かれているので、そういうものをまず一つはぜひ読んでみて欲しいです。

伊藤..そうですね、今、山根さんがおっしゃいましたけれども、私自身も若い頃、自己否定感がとても強かったんですが、今の若い世代そしてそれ以上の方々でも、激しい競争社会の中で、自分は価値がない、意味がないと思い込んでいる人はたくさんいると思うんですね。そういう方たちに、そうではない見方や人生観を提供できるのが遠藤文学の魅力であり意義だと、自分の体験から思っています。

それともう一つは、特に今「信州 風の家」という自然の中での活動をしていて、自然と信仰の関わりも遠藤文学の魅力、特徴だと思っています。自然と共にそして「自然から学ぶ」信仰のあり方。特にこの動植物を含む「自然から学ぶ」信仰が、遠藤文学の中で大切な位置を占めていると私は思っています。満洲の大連にいた時のクロという犬との関わりとか、九官鳥との関わりとか、そういうものの中で遠藤さん自身が癒されている。そしてそれはただ単に、動物に癒されているのではなくて、その背後に、その動物たちの眼差しを通して、イエスの眼差しを見て感じている。生きとし生けるもの全てを包んでいる存在があり、その存在が、生きとし生けるものを通して働くという信仰観は、温暖化や環境破壊が問題になり、自然と人間の関係の見つめなおしが問われている現代、もっと注目される必要があるのではないのでしょうか。カトリックの公式文章だと、「自然と共に」歩む信仰ということはよく言いますが、「自然から

学ぶ」信仰と言うことはあまり言わないんです。きっと言いにくいんでしょう。汎神論と思われるから。

例えば遠藤さんの『深い河』で大津の言葉にあるように、中世からの伝統的なカトリックの教えでは存在には序列があつて、人間がその序列の中のトップ。トップだからこの自然をちゃんと管理監督しなきゃいけないという考え方です。もちろん暴君になつてはいけない、でも神から一番上であり特別な役割を与えられた人間は、よき執事として自然を管理するんだと言う見方をするんですね。私にはどうしてもそれがピンとこない。それは自分自身の深層意識と関わっているのかもしれないですが、自然は単に管理され、世話されるだけの存在なのかという疑問があります。自然から「学ぶ」という信仰、つまり人間はもちろん大切な役割を与えられているけれども、自然も神様から大切な役割を与えられている仲間ですから、時に信仰面で自然の方が優れている時もある。パウロの「キリストの体」のたとえに絡めて言えば、人間をもし脳にたとえれば、脳には脳の大切な役割がありますが、手や足や心臓に相当する動植物にも独自の大切な役割があると思うのです。人間だけが特別なんだと強調しすぎるのはどうかと思います。そういう点からも、これから遠藤文学、特に『深い河』などに描かれている新たな信仰観の可能性に注目したいなと思っています。

司会…ありがとうございます。自然から学ぶということが汎神論とは決定的に違うっていうのはどういうことでしょうか。

伊藤・細かいことは森司教さんに聞いていただいたほうが。(会場・笑い)

私は神学者ではないので詳しいことはわかりませんが、井上神父は、先ほど挙げたパウロの手紙であるコリント書一の十二章「キリストの体」をすごく大事にしている、そこに描かれている手とか足とかの「体の部分」の関係性は、通常あれば人間の関係性を表していると言われているんですが、井上神父はあの手とか足とかの部分には、人間だけでなく自然も入っていると言っています。このような「キリストの体」の中で、人間だけでなく自然もその大事な一部だという見方はとても大切で、それは別に木や草花を神とするのではなくて、人間も含めて自然もそれぞれ唯一の神の働きの場であり通路なんだという見方なんだと思います。そしてこの、人間も自然も「神の働きの場であり通路」という考え方に立てば、私たちの根本的な役割は、その神の働きである聖なる風を通路として素直にお通しすることであり、その働きや流れを邪魔しないことが大切です。しかし、往々にして人間は我欲にまみれているために、心の扉が我欲によって錆び付いてギシギシし、神の働きである聖なる風を通路としてスツと素直にお通しできない。一方、草花の方は我欲にまみれていませんから、神様の聖なる風の素直な通路となつて、スツと風をお通しして私たちに示してくれる。だから私たち人間は、草花などの自然から祈りや信仰のあり方を学ぶ必要があるのです。そうした草花や自然の姿そして信仰観は、キリスト教詩人の八木重吉さんや星野富弘さんなどの詩、そして井上神父さんの詩にもよく描かれています。こうした信仰観というか神学が、井上神父さんや遠藤さんにもあって、こうした信

仰観をこれから日本のカトリック教会は、もっと世界に発信していった良いのではないのでしょうか。

司会…ありがとうございます。森司教様もお願いします。

森…僕はそんな難しいことはわかんないですけども。遠藤さんの作品は人間を非常に丁寧に描いているわけですね。例えば、『海と毒薬』でも、勝呂って人の苦しみ、そしてその悪に巻き込まれていく人間のどうしようもなさというのを彼の身になって一所懸命、そう迷いと、自分のコンプレックスとを書いていきますでしょう。それから、『沈黙』でもそうですけれども、キチジローの立場、あの苦しみも丁寧に追っているわけですよ。『深い河』の中だと、戦争中に人の肉を食べてしまったっていう登場人物の気持ちも丁寧に追っていて、裁いてないわけね。『女の一生』のあの主人公の女性の気持ちを丁寧に追っているし、キクの一生なんかの場合には、裏切っていく役人の後ろめたさも、裁かず丁寧に追っているわけです。

ですから、僕は、遠藤周作の本質にあるのは人間の生きることの悲しみと神の心の共感、それが遠藤周作の中心にあるテーマなんじゃないかなって思うんですね。だから神学的なぶつかり合いとか衝突とかいうことよりも、遠藤周作のカトリック教会に対してのメッセージ性ってというのは、神を人間の悲しみと共感する存在として捉え、人間がどんなにひどい罪を犯しても、神はそれを悲しみながら、後ろめたさを持っている存在にも、自分なんか生きていく資格はな

いと叫ぶ存在にも、神は共感してくださる。そしてそのコンプレックスをもって叫ぶ、その人間の叫びは、神の心とも共感し合う。そのように人間を丁寧にかかず捉えていくところに遠藤周作さんのあの個性がある。

で、そういう観点から見ていった時に、現代社会、特に現代の日本の社会には人間の心の内側を丁寧にみて寄り添っていく、こういう人生哲学とか人生観が育ってない。で、カトリック教会も、結局は教義とか組織の論理で人と向き合っちゃうと、人の悲しみには共感できなくなっちゃう。だから、遠藤さんの、私たちカトリック教会に対しての貢献というのは、そういう意味で、共感し合う神の姿を、真正面から私たち投げかけてくれたところにあります。そこに、彼のメッセージ性の新しさ、ユニークさがあるような気がするんですね。

で今の教皇も、神が私たちの苦しみに共感するってところを強調しています。ところが、井上神父さんとか遠藤さんの時代のカトリック教会は、教義を通して人を救おう、導こうとしました。そこに、強固なカトリック教会の壁があり、その壁を打ち破ろうとしているのが今の教皇であり、ある意味ではその先駆者として遠藤周作さんなんかを位置付けることはできるかなってというのが、僕の捉え方です。

**司会**：ありがとうございます。遠藤さんや井上神父が共感する神理解へ至るきっかけなどありますか。

森：遠藤さんの後ろめたさが、多分、一つあったんだろうと思うんですね。遠藤さんには、フ

ランス留学中の最後に関わったフランス人の女性の恋人がいる。で、自分が体を悪くして日本に帰ってきた。でもそれにもかかわらず、やりとりしてた。でやりとりしていなながらも、順子さん、奥さんと出会って、そこで結婚しちゃう。彼自身の後ろめたさというか、罪悪感というか、彼自身が傷を負っている、というようなものが一つは根底に僕はあったのかなって思う。

それから、彼自身が自分を支えるために、とにかく最後はカトリックに行かざるを得なかったわけです。捨てきれずに。で、自分の後ろめたさとか罪深さを包み込んでくれる神っていうのが、その当時の教会の正統な窓口からは伝わってこないわけですね。ですから、そこに遠藤さん自身の追い詰められた気持ちがあり、遠藤さんは、自分の心情、心を支えていくための本物の神、あるいはキリストは何かって言った時に、彼がああ『沈黙』の前に書いた作品が、あんな『おバカさん』だったわけですね。

『おバカさん』は徹底的に理屈、損得を超えて、人の過ちとか人の罪深さにこう責めずに寄り添い続ける。で、そういう姿が自分の罪深さをも支えてくれるっていうような動機付けが入るのにあっただらうと思う。それから彼の健康の問題もありますよね。常に体を悪くしてた。当時の教会だと、神に近づくためには、苦行をし、それから立派に生きなければならぬというような修徳主義が当時のカトリック教会の根底にありましたから、それに遠藤さん自身は感性的に反発されたんだらうと思います。でさつき、ヘルツォグっていう名前が出てきちゃいましたから言いますけれども、ヘルツォグさんっていうのは、その頃のS Jハウスの修道院長だったんです。でも、女性との問題で大変なスキャンダルになっちゃった。遠藤さんはそれを、自



分で体験してるわけね。で、そういう過ちを犯した人をすぐにあの当時の教会だと排除して本国に返しちゃう。だからベルメルシユ事件なんかがあったんですね。で、そういうものを見ながら、非常に多感な、あの遠藤さんは、裁く神だけでいいのかっていう問いを教会にぶつけていったわけね。で、神の本質を追い求めていった時に裁く神だと、人類は誰一人神の前に立つことはできないだろうっていうようなところを追い求め追いついて彼の生涯の神理解が完結するのはあの『深い河』だったんじゃないかなと思っております。

山根・本当に森司教様の言われた通りだと思いますし、それにちよつと付け加えさせていただきます。遠藤さんはもともと、生まれた時からお兄さんがものすごくできる人なんです。お兄さんは灘中を出てその後も一高東大を出ましたけれども、本当に勉強もでき、運動もできる優等生で、まさにドラえもんの出来杉くんのように素晴らしい人でした。それに対して、遠藤さんはドラえもんのび太のような存在なんです。体も弱くて病気もしがちだったり、あと、意志が弱くて、暴力や何か肉体的恐怖があれば信念を通すことはできない、そういう弱さを持っている自分にたいして劣等感をものすごく持っていたということが子どもの頃からの環境からあったんですね。それでいながらも、お母さんだけは劣等感を感じる周作に寄り添って、「あなたにもいいところがあるから」「あなたは文章を書いたり、話をしたりするのが面白いじゃない」など言いました。こんな面白いエピソードがあります。周作が「今日は十人友達を連れてくるから」と言って、お母さんがおやつを準備して待っていたら、野良猫と野良犬を十匹ほ

ど連れてきて…（会場・笑い）

そういう優しさっていうのはすごくあるわけですね。そういうのをまたお母さんは大切に見守っていた。そのお母さんが傷ついて、夫から捨てられるという形になり、家庭が崩壊していくということになります。

そしてその中で犬のクロにだけ苦しみを訴え、クロが寄り添ってくれてたけど、そのクロとも引き裂かれて別れなくちゃいけなくなつて日本に戻つてきます。お母さんはその苦しみ、挫折の中でカトリックに出会っていききました。決して棄てない神の愛に出会いました。お母さんがそこから洗礼を受けていく中であつて、遠藤さんもお母さんに促されて洗礼を受けていくことになりました。そういう子どもの頃からの挫折に加え、元々病弱で病気を繰り返してました。遠藤さんは順子さんと結婚してからも十回入院して八回手術を受けたそうです。順子夫人はずっと「自分は看護婦として、なんとか夫が元気で原稿が書けるように、それを支えるのが私の人生だった」と言い、「でも、振り返れば遠藤周作という作家は、神様から二つの恵みをいただいた。病気の経験と、書く才能と。これがセットになつて夫の作品は生まれた」とおっしゃっていました。そういう体験もあつて、遠藤文学は寄り添うというやさしさがあるのかなと思います。

司会…ありがとうございます。では、若い世代に向けてどのような遠藤作品との出会いをすすめますか。

伊藤..私は、特に文学少年というか、そういうタイプではなかったもので、もちろん純文学とかも影響を受けていますけれど、一番影響を受けているのは、エッセイが素敵だと思っています。エッセイの中には、いろんな素敵言葉があつて。「人生のマイナスはプラスに変わる」とか「人生に無駄なものは何一つない」とか。だからもし最初に読まれる方がいらしたら、『人生ひとつだつて無駄にしちゃいけない―遠藤周作の箴言集』って遠藤さんの短い言葉を集めているのがありますよね。そのほか山折さんがまとめた『神と私 人生の真実を求めて』とか。シスター鈴木が出しているものもあつたと思います。そういう読みやすいものを見て、何かこれいい言葉だなんて思つたらエッセイを実際に読んでみる。さらに興味があつたら、短編小説や中間小説といわれる読みやすい小説、さらには純文学などを読んでみる。そういう形でいいのか なつて私は思っています。

森..あの上、どんな本を読んだらいいか？

山根..はい、何かおすすめの一冊があれば…

森..例えば今ここに、二十代の方で、遠藤さんの本を読んだつて方はどれくらいいますか？  
(会場・ざわめき)

何を読みなさいって勧める前に、あの若い人たちの、これからの人たちのあの問題意識がどこにあるのか。だから、今の若い人たちが『女の一生』を丁寧に読むと、多分イライラするんじゃないかな。

(会場・笑い)

ゆっくりゆっくりとしか出てこない。ですから遠藤さんと今の若い人たちでは時代感覚の違い、世代の感覚の違いなんかがたくさんある。すごい大きな時代のギャップがあるような気がするので、何々を読みなさいっていうよりも、僕は遠藤周作の作品を取り上げて、読書会っていうような形でそこに近づいていく何かを作ることの方がおすすですね。遠藤周作の作品には人間理解がすごく深いんですけれども、例えば『悲しみの歌』なんかはまた全く別の雰囲気の中で、現代の生きる人たちの問題点を明らかにしていますね。いろんな側面があるので、どれをといてよりも、とりあえず自分達の読書会として取り上げて、それぞれがどういう角度から共感したり、どんな風な魅力を感じたかって丁寧に話し合っていくことの方を僕はおすすめます。多分今の若い人には、遠藤さんの作品は多分忍耐を呼ぶような作品じゃないかなって気がするので、ちよつと返事は僕できない。

山根・・はい、やはり私は『沈黙』をおすすめしたい部分もありますけれども、今話がありましたように、逆に本当にハードルが高すぎて、今の若い人たちにすぐに『沈黙』を読んでもというのは正直大変なところもあるかと思えます。ただ、私は授業で『沈黙』を扱っています。それ

で授業だから読まなくちゃいけない。そうして無理して読むとほんとにすごくインパクトを受けるというところがあります。でも一回読んだだけでは分からないので、その後、読書会などでいろいろな気づきをディスカッションしていくともものすごく深まっています。例えば、『沈黙』を最初に読んだ時、キチジローに対してとても嫌な人間だと思っていたのが、だんだん読んでいくと「ああ、自分こそキチジローだ」と、キチジローが一番人間らしくて苦しみ悩みなから、救いを求めるとだんだんと気づいていくんですね。こちらが何も言わなくても、学生たちがそういう風に言い出します。そういうような体験が遠藤作品にはあります。きっかけさえあれば今の若い人たちにすごく大事なものが届いていくというのがあるんですけど、きっかけがなかなか無いし、ハードルが高いつているのがあると思うので、やっぱり一番にはエッセイというのがいいと思います。

若松英輔さんと生誕百年の風編集室オンライン対談を行ったのですが、若松さんもエッセイがいいんじゃないかということを書いていました。若松さんもエッセイが最初で、吉満義彦さんを知ったのも遠藤さんのエッセイだったと言っていました。そうしたエッセイを通して色々な人に出会っていったそうです。そういう中で、エッセイの次におすすめしたいのは中間小説です。例えば『おバカさん』や『悲しみの歌』です。『海と毒薬』よりも『悲しみの歌』の方がエンターテイメントの小説として読みやすい。また、元々若い人たち向けに書かれた『砂の城』など青春小説もあります。ただそういう小説とはなかなか出会いがないと思うので、読書会なんかをきっかけに読んでほしいです。

それともう一つ、やっぱり遠藤さんのすごいところっていうのは、キリスト教とは縁遠い日本にあって、ネラン神父さんの言葉にもありましたけれど、遠藤文学によって、多くの日本人をイエスと出会わせたということではないでしょうか。要するに、信仰へとか、教会へとかでなくて、まずはイエスと出会うということが全ての始まりで一番大事なことなので、イエスと出会うっていう体験が遠藤さんの作品にはあります。

ここに『私のイエス』を持ってきていますが、『私のイエス』なんかには、若い人たち向けの新書版として元々出ています。でも、「風の家」に関わるようになった人たちと話しているも、小説ではなくてこの本を読んだのがきっかけでと言う方たちが意外と多いんですね。ですから、すごく読みやすく書いている遠藤さんの入門的なキリスト教の本もおすすめです。そしてこの『私のイエス』を読んでキリスト教に関心を持ったら、井上洋治神父の『日本とイエスの顔』とか読んでみたらと、遠藤さんは本のあとがきで薦めています。

さらに遠藤さんの本では、この後、『イエスの生涯』『キリストの誕生』と進んでいくとよりキリスト教への理解が深まっていく、という風に、やっぱり遠藤さんの作品は純文学だけではなく、入りやすいところから徐々に深まっていくところまでたくさん作品があるので、そういうまずは入り口の入りやすい所から出会うって行ってほしいなと思います。

ただ、そういう情報に出会うこと自体がなかなか難しいので、今回ちょっと紹介したい本があります。この新潮文庫の『文豪ナビ 遠藤周作』という遠藤周作に出会うための案内をしてくれる本で、出たばかりで書店に並んでいます。私もその中の、評伝と名言集を担当してい

ますが、今年は生誕百年で、今まで遠藤周作になかなか出会うきっかけがなかった若い人に出会う機会になってほしいと願っています。

司会…ありがとうございます。会場の中から質問などあれば、受け付けたいと思います。

山根…質問じゃなくて感想でも。

森…今、山根先生がね、遠藤周作がイエズスを日本の社会の人に気が付くように投げかけたという意味で貢献があるというお話。まあその通りかなと思いますけど、でも、そう簡単じゃないなっていうのが僕の判断なんです。というのはね、遠藤さんの作品について映画化がされてますでしょう。

『沈黙』も『深い河』も映画化されていますよね。それから『海と毒薬』も映画化されてる。それから、『わたしが・棄てた・女』っていうのも映画化されてる。で、錚々たる監督が遠藤周作の作品を映画化してる。でも、その作品をみていくと、あの遠藤さんと全く違う結論に行っちゃってるわけね。届いてないんです。だから、どんなに遠藤さんのユニークさ、遠藤さんのキリストの向き合い方と、日本の社会の教養人、知識人のあのキリストの捉え方のギャップとというのがすごい。だから僕自身が正直に言いますと、私たち自身がどのように現代の人たちと向き合いながら自分の言葉で、現に生きている目の前の人にキリストを伝えていく、感じさせ

ていくかというのは非常に大きな問題、課題だと思ってるんです。遠藤さんの作品の映画を観ることによってそう感じるのは、日本の社会というのはキリスト教にとっては非常に手ごわい社会というのが正直な感想なんです。

山根：本当におっしゃる通りで一般には映画の方が気軽に観ることができるわけですが、私も例えば遠藤文学を取り上げる授業で「本を読む代わりに映画を観てレポートを書きました」という学生がいたりします。本当に映画だと誤解されます。映画は遠藤さん自身の言っているように、「もう嫁に出してしまつて、向こうのしきたりになつてしまつたから仕方ない」と、最初は自分の思いが伝わっていないという不満があつたけど、映画監督の作つた違う芸術作品というところがあるので、そういう意味で仕方がないと思つていたようです。でもそうなるしまうところに、作者の原作に込めているものが伝わっていないという問題があるわけです。ですから、実際に作品を読んでもらいたいと思います。ただそういう中で、私は『イエスの生涯』と聖書を使って授業をやっていますが、本当に丁寧に読んでいくとイエスに対してものすごくシンパシーを感じて、自分がイエスと出会いたいという思いを持つようになっていくのを実感として感じています。もちろん、そこからの信仰へは距離がありますけれども、イエスという存在はこの二千年の歴史の中でどうしてこんなにも大きな影響を与えてきているのか、ということですね。今、森司教様が言ったように、日本の知識層がキリスト教について聞いたとしても、本当にイエスと出会うことにはなかなかありません。そんな中で遠藤さんがイエス



を伝えたいと思って書いている小説やエッセイは、日本人の持っているキリスト教に対する距離感を埋めて、実感のもてるイエスと出会わせてくれます。

司会…ありがとうございます。

質問者1…お話の中で山根先生が、遠藤文学を大学の講義で使用されているということでしたが、山根先生の授業を通して感じた、遠藤文学への若い世代の反応を詳しく教えてください。

山根…いつも授業の後にリアクションペーパーで授業の感想や質問、意見を書いてもらいますけれども、それを私は授業の中で大事なものとしてしっかり書いてもらいます。で、次の授業の時にそのリアクションに対して答えたり紹介したりします。ですから反応はすごく受け取っていますけれども、本当に、今の若い人はこんなに苦しんでいるのかと思わされます。例えば今までに死にたいと思ったこととか、そういう経験がある学生はすごく多いです。いじめなどを受けてきた経験、自分の大切な人が亡くなったとか、ペットもそうですが愛するものとの別れや将来に対しての不安や色々な挫折の経験、自己否定や自己嫌悪など様々な苦しい重荷を背負っています。そういう自分の問題と真面目に向き合って、それを吐露して、それに対して自分はどういう考えを持って前向きに生きていけるのか、そういうことを遠藤さんの『イエスの生涯』と聖書を読みながら授業を進めています。

そういう中で本当に一番辛いのは、例えば遠藤さんが作品の中で、病で苦しいとか、貧しくて苦しいとか、そういうマイナスなこと以上に、それによって誰も自分に関わらない、理解してくれない、自分なんて生きていてもいなくても同じなんだと、そういうふうに思ってしまう孤独の苦しみが、大変なんだと言います。そういう人が、遠藤さんの作品を通してイエスの眼差しに出会って、自分の悲しみを誰よりも分かってくれている存在がいるんだということに出会っていく、ということが救いになっていきます。そういうことを学んだり、そういう価値観に出会うということは、特に今の日本の教育の中でないんですね。そういう意味で遠藤さんの作品に出会っていくことに意味があります。ですから、どんなことでも横の人間関係の苦しみだけを思えば行き詰まってしまうので、それを越えた縦の軸の眼差しがあつてそのもとで自分自身の存在や出来事を見ていくような、先ほどの伊藤神父さんの言葉をかりると、みんながキリストの体としてつながり合っているという中で自分を見ていくというような、神様からの視点、裁きの視点ではなくて、誰よりも悲しみを分かっているよと寄り添ってくれるような神の眼差しに出会っていくことを本当に必要としていて、誰もが本当は魂の渴望として求めているけれど自分でも気づいていない、周りに教えてくれる人もいない、そんな中であつて授業をやっていると本当に多くの学生たちが救いを求めているんだなと感じますね。

司会…ありがとうございます。

質問者2…三点質問させてください。まず、なぜ『沈黙』が出版当初誤解されカトリック教会に禁書扱いされたのでしょうか。次に篠田正浩さん監督の映画では原作と異なるメッセージの作品になってしまったということは理解できるのですが、スコセッシ監督は遠藤と同じカトリックの信仰を共有しているにもかかわらず、原作と少し離れた主題の映画になったのは、なぜでしょうか。最後に、先ほど森司教様の自らの歩みが遠藤さん、井上神父の歩みと少し異なるというお話でしたが、この点を詳しく伺いたいです。

山根…一応私が聞いていた中で、遠藤周作の『沈黙』が誤解というか、大変批判された一番大きいところは「踏むがいい」とイエスが踏み絵を促す、棄教を促すような言葉を発するなんて絶対にあり得ない、殉教を勧めるのではなく踏み絵を踏むことを促すというように読める部分

が特に問題であったようです。

作品全体を読んでというより「踏むがいい」という言葉が取り上げられ、「踏むがいい」ということ自体がおかしいという批判がいろんなところで言われました。ですからそういう転ぶことを促すようなことを書いているのは殉教を大事にしていけないと非難わけです。遠藤さんは殉教者に対しては、信仰の力と神の恩寵に支えられた崇高な勇気を持った者として畏敬と憧れをもつと言っています。けれども殉教ができない、拷問を受けて肉体的に責められる、となつたらどうしてもそれに耐えられなくて踏み絵を踏んでしまう、そういう弱さをもって苦しむ者を見捨てるのは神様の眼差しではない。その眼差しは苦しみを受け取って、本人が味わって

る苦しみを共にして、なすがいいと言いました。これは遠藤さんにしてみれば聖書に基づいて書いています。「先に」というところは、ペトロがイエスを裏切って「イエスを知らない」と言うことに先立って、それを止めるとか許さないと言うのではなくて、どうしてもそうになってしまう人間の弱さを分かって後でまた立ち直っていくように祈っているからね、と言うのが最後の晩餐でのイエスのペトロへの眼差しでした。そう言うものを聖書に基づいて表現したかったのが遠藤さんなんですね。ですから、その聖書の箇所を重ねるようにロドリゴが踏み絵を踏んだところで鶏が鳴いたと入れています。

それからスコセツシ監督のことについてですが、私もその映画のパンフレットに解説を頼まれたりしていましたがコメントしますと、スコセツシ監督は本質的にカトリックの精神を大事に思っています。日本で作られた篠田監督の『沈黙』の映画は、結末が変えられ、遠藤さんの意図するものとは全く違うものになってしまいました。遠藤さんもシナリオを見て変えてほしいと頼んだけれどもダメで出来上がってしまった作品でした。

一方、スコセツシ監督の作品の方は『沈黙』を相当読み込んで作っていますが、彼は自分の信仰を託していくと言うところがあると思います。原作との一番の違いは最後、小説では切支丹屋敷役人日記というのが最後にあって、仏教徒として葬儀があって戒名が与えられたというところで終わるのですが、映画ではその棺の中まで映像で描いたんですね。そしてロドリゴは外からは踏み絵を踏んで仏教徒として死んでいくと見られるけれども、実際には役人日記の中にロドリゴ自身が岡本三右衛門として名前を変えても信仰を持ち続けて隠れキリシタンとなっ

た密かな信仰の共同体があることまで、暗示的に書かれているのですね。それで最後仏教徒として死んでいきますけれども、実際に目に見えない神と人間との関係は誰も外の人が何か言えるものではありません。映画ではその目に見えない神からの眼差しとして、ロドリゴが、日本の農民たちが大切に祈っていた、掌におさまる素朴な木の十字架を、最後まで肌身離さず持ち続けて、妻が手に持たせたように描かれています。ということは家族で十字架を大事にし続けてきた生き様があったということ、最後には示しています。スコセッシ監督は、遠藤さんが伝えたかった思いをできるだけ受け取ろうとしたように思いますが、分かりにくいところもあったでしょう。ただし日本の篠田監督の『沈黙』に比べると、原作の信仰的テーマをしっかり描いていたといえるでしょう。

森…あの最初の質問なんですけれどもね。長崎の教会は伝統的に信仰を守るということを中心に指導してきた世界なんです。だからそんなことがあっても命かけて信仰を守りなさい、だからどんなことがあっても踏み絵を踏んじやいけないよっていうのが伝統的なもの。それに対して、『沈黙』は「踏んでもいいんだよ」ってキリストに言わせてしまう訳ですよ。でそれは長崎のカトリック教会ではもう考えられないことで、これはもう絶対に許されるべきことではないって言って、非常に厳しい指導を当時やってしまった訳ですね。当時の東京のカトリック神学院の神学者たちも教義的には神が踏んでもいいって言うはずが無いって言う神理解だった。神は人間の苦しみの中では沈黙をずっと守り続けて、あの十字架の上でもキリストは「神

よ神よ何故捨て給うのか」と言われた時に神は答えを出してない。神は苦しみの中では沈黙し、人間がそこでどう答えるかを見てる。待ってる。だから、神が踏んでもいいと声を出すこと自体が、神理解を壊してしまっているという伝統的な教義のあの上に立っている長崎の教会なんかでは受け入れ難かった。だから厳しい判断がなされたつてのが一つ。

それから、二つの『沈黙』の映画ね。あの篠田正浩さんの『沈黙』の最後はね、とうとう踏み絵を踏んでしまったロドリゴが、女性と男女の関係になっていくと印象付けちゃってるわけね。ですから、それは、遠藤周作の「沈黙」というテーマでは本当はなかったのね。人間がどんなに過ちを犯しても優しく包み込むのが、神の本当のあたたかさで、神の本質はそこにあるんだよ、って言うような春の日のようなあたたかさを、最後のロドリゴにも表現したかったんです。けれども、映画はそうではなかった。それからスコセッシ監督の方も、ヨーロッパのイタリヤの伝統の中でね、『沈黙』を読んでしまったもんですから、彼なりの解釈がやはり最後の場面でも滲み出てきている。あの遠藤周作の本当の神理解、伝えようとした神理解、キリスト理解は映画の中では出てない。裏切られちゃってるというのが僕の印象です。

そして僕と、遠藤さんと井上神父さんと、どこが違うのかって言う大きな問題なんです。表現が悪いかもしれませんが、遠藤さんと井上神父様が、ヨーロッパ、フランスの教会に行った時期は第二バチカン公会議の前の時代だった。ですから、カトリック教会は、社会の営みから人々を守る聖なる城塞、お城であるというカトリック教会の自己理解があった。で、そこに全てを捨てて飛び込んでいかないとカトリック信者じゃないよ、あるいはそれぞれの文

化とか何かを持って理解しようとするのはカトリックじゃないんだよって言うような、カチカチのあの教義理解が、カトリック教会の厳しい壁としてあったもんですから、そこで弾き飛ばされてしまった。で、自分は日本人だから日本的な伝統とか日本的な感性の中でキリスト教を理解してって良いんじゃないかって言うような歩みを始めたのが、お二人。で、井上神父さんなんかは法然の方、南無アツバと、あちらの方に進んでいかれた。で、遠藤さんは人間の弱さって言う視点に立ってキリストと向き合うようにした。

それで、僕はどうしたのかって言うと、ヨーロッパの教会という相手の懐の中に飛び込んだって言うんです。壁に跳ね飛ばされるんじゃなくて、相手の懐の中に飛び込んで、で、徹底的にその中に自分を捨てて、それを突き抜けていくって言う歩みをしたんです。というのはその当時の授業もラテン語、教科書もラテン語、それから試験もラテン語、それから面接もラテン語。それから司祭としてゆるしの秘跡をさずける資格を得るための試験もバチカンに行つてラテン語で行う。そう言うラテン語で思考された世界の中に、遠藤さんや井上神父さんなんかは跳ね飛ばされてきたわけね。で、僕はどうしたかというラテン語のメンタリテイで育つてきた教義、ヨーロッパの伝統があるから、それを突き抜けないといけないって言うような思いの方が僕は強かったので、跳ね飛ばされずにむしろ飛び込んでいった。で徹底的にヨーロッパの神学の歴史を遡っていくわけです。だから十九世紀の神学、それから十八世紀、十七世紀十六……ずーっと遡って遡って歩んで行った時に開けてきたのが聖書なんです。聖書を自分の心で読む。

そして聖書の中のキリストと自分の人生を真正面からぶつけ合うことで十分なんだ。それが土台なんだって言うような確信を得ることはできた。ですから、そこにたどり着いた時はすごく自由になって自分の言葉でイエズス・キリストのことを語り、色んな教えのことを全部ほぐして語ることができるようになった。で、たどり着いたところは遠藤さんなんかと同じところなんですけれども、僕の場合には、そういう歩みをしてしまったんですね。ですから、僕に対して同僚たち、仲間の司祭たちや、若い神父様たちが僕につけたあだ名は、神学の解体業者って言う。(会場・笑い)

色んなものを壊しちゃう。で自分の言葉でキリストを語っていけばいい。そしてそれを伝えるためには、お説教とか何かを語るんじゃないかって、相手の心の叫びを受け取って、それに共感していく。その共感しあう、悲しみに響きあうことが、あのキリストの心の本当に証していく道だろうというようなところに立っているの、遠藤さんなんかの歩んだ道というのはすごく僕にとっては参考になりますけれども、そこだけにはとどまりたくないって言う思いは非常に強いです。

司会…ありがとうございます。

山根…日取り後に今一つ、遠藤さんの『沈黙』の中の「踏むがいい」っていうのが誤解されてたっ  
て言う点について話しておきます。よく読むと「眼差しが訴えている」と言う書き方なんです



ね。本当に声が聞こえたと言う意味ではなく、眼差しが訴えている、目に涙を浮かべた潤んだ眼差しが訴えていると表現されている個所です。だからその辺、微妙な文学的な表現をしているんだけど、理解がなかったと言うところでは、すから遠藤さんは、神は沈黙していても、その沈黙の中に声があつて、キリストはこちらの弱さ、辛さ、苦しさに共感してくれて目を潤ませてそれを受け止めてくれて、一緒に悲しんでくれていたのかのよう受け取られたわけですね。それが、神が「踏むがいい」と上から命じて促しているのかのよう受け取られたんですね。その辺も正確に理解されていないと言うところでは、

司会…ありがとうございます。